

開催地名：北海道厚岸町	
開催日時	令和元年 11 月 2 日（土） 13：00 ～ 14：30
開催場所	厚岸情報館
語り部	武蔵野 美和 （岩手県陸前高田市）
参加者	自主防災組織等 60 名
開催経緯	現在、厚岸町では、32 自治会のうち、28 自治会において自主防災組織を設けていますが、形骸化している組織もあり、自主的かつ活発な活動に至っていないのが現状である。 また、町の防災担当や自主防災組織の役員には男性が多く、災害時における女性の視点からの支援体制の構築に苦慮している。今回は女性の語り部からお話を伺いたいと思う。
内容	（１）はじめに 私が住む陸前高田市は岩手県南部の太平洋側に位置しており、岩手県の中では比較的温暖な地域で、東北の湘南とも呼ばれている。この陸前高田市は、皆様ご存知のように東日本大震災で津波の被害を受け、街が壊滅してしまった。本日は「生活者の視点で考える防災」と題して、話をしたい。 （２）東日本大震災の被害状況 皆様ご存知のように、三陸沿岸は昔から津波の被害を受けてきた。さかのぼれば明治三陸大津波や昭和三陸大津波、チリ地震の津波の被害が有名である。これらの津波被害を受けて対策が講じられてきたにも関わらず、また、情報網が整備されていたにも関わらず、東日本大震災では多くの犠牲者を出してしまった。市のハザードマップでの想定を遙に超える 15 メートルの津波が押し寄せた。津波は水の塊となって川をさかのぼってきた。市内の公共施設についても、市庁舎や図書館、体育館、公民館、小中学校や保育所等々の多くの施設が全壊してしまった。人口 24,246 名のうち、死者・行方不明者は 1,757 名にのぼる。雇用促進住宅では、建物自体は残っているが、津波が来た 4 階まではベランダも窓も家の中の物もなくなっており、5 階より上はそのまま残っていた。指定避難所になっていた体育館にも津波が押し寄せ、天井の梁にしがみついて助けを待った 3 名の男性しか助からなかった。海岸線に多くの松の木（約 10 万本）はすべて流されてしまったが、その根や枝が多く被害をもたらした要因のひとつではないかとも言われている。 （３）災害は必ず起こりうる 日本の国土面積は世界の約 0.025 パーセントであるが、自然災害の 2 割を担っていると言われている。今年も台風の災害が頻発しており、災害に対する備え

は必須である。

- ・ 一人一人が自分が安全だと思える場所を確保すること。
- ・ 食糧をストックすること。(ローリングストックの薦め)
我が家が丸ごと備蓄倉庫という考え方。食べ物や日用品を少し多めに購入し、日常生活で消費していく。
- ・ アレルギーに対応した食品や、赤ちゃんのミルク、個々の病状に応じた薬等については自分で備える必要がある。
- ・ 逃げることは極めて重要。家族を信じてまずは逃げることを相互で確認。
- ・ 「今を守れるもの」をかばんに入れておく(飲食物、衛星用品、ポリ袋当)。
- ・ 避難所では誰が何をするか、役割分担を予め決めておく。
- ・ トイレを安心して使えるようにしておく。
- ・ 究極の防災は逃げなくてよいところに住むこと。

備蓄する物の内容についてや、避難所での運営については生活者の視点が必要である。多様な人たちの存在を認識すること、ストレスがかかることで生じるリスクを理解していること、生きるための知恵を知っていることが重要になってくる。避難所では、毎日が生活をよくするための工夫の繰り返しである。様々な意見を出しあえる風通しのいい環境を日頃から作り、いつの日か来るかもしれない災害に負けない準備を心がけたい。

また、想定外とは想定を怠ったものの言い訳にすぎない。誰かが何とかしてくれるという考え方は間違いである。行動の判断は自分で行うよう心掛けてほしい。



開催地より

東日本大震災で被災された方々の避難行動の様子を踏まえ、また、自身の被災地での経験なども交えながら、災害に備えるための考え方や具体的な方法(非常持出品の揃え方など)について講演いただいた。一層の自主防災組織の活動の活性化に繋げたい。